故　釘　宮　磐　氏　を　し　の　ぶ

釘宮　磐君のこと

平　山　復　二　郎

釘宮君が去る7月9日亡くなった。釘宮君とは，ほんとに長い交りだった。とにかく，明治34年（1901年）に，東京府立第一中学校に，新入生として入学して以来，話しあったわけでも，なんでもないが，生涯を通じて，同じような生活コースをたどったからである。

中学5年間の学窓生活を，一緒にすましてから，一高では2部甲の同窓生として，大学ではまた土木工学科の同窓生として，学生生活をともにし，明治45年に卒業すると，すぐともに鉄道院に就職，以来昭和13年に，私が退職するまで，30年ちかくを，終始，建設畑の同僚として親しく，鉄道の技術生活を送ったのである。この間，兵役では中野電信隊に一年志願兵として，軍隊生活をともにしたし，関東震災では，これまた先輩の太田（円三）さんのもとで，ともに復興事業に働いたのである。

数ある友人中，釘宮君ぐらい縁の深いのはないが，数えてみると，今年で交遊60年になる。おたがい齢古稀をこえて，いずれはと思っていたが，今年はからずも，君に先立たれてしまったのである。

釘宮君のきちょうめんで，温厚誠実な性格は，一度接したものなら，だれでもわかるにちがいない。この性格は若い学生時代から，とうとう一生変わらずじまいであった。長い交りにあって，君が激したり怒ったりしたのを，みたことがない。落ちついて，じゅんじゅんと説くのである。一緒に相談したり話しあったりした機会は，ずいぶん多かったが，いつも君のこの態度には反省させられた。若い頃から，一見おとなしい聖人にみえながら，なかなか強い信念の持主であって「柔能く剛を制す」というが釘宮君こそ，その典型的な人物だったと思っている。なにより君のやった仕事が，これを証明しているのである。

釘宮君の現役生活の40年余をみると，後年の6年ばかりを，東大第二工学部の教授として送った以外は，ちょっと君の性格には，ふむきと思われる建設現場部隊の長として，ずっと第一線に働いたのである。そして，そのなかには，いくつかの画期的な大工事があった。

釘宮君は鉄道院に就職すると，すぐ九州の建設事務所に赴任，大正10年に欧米に留学するまで，そこにとどまったが，留学から帰朝すると間もなく，復興局に転任，隅田川橋梁工事の現場所長を引受けたのである。

この橋梁工事は，アメリカから空気ケーソン工法の新技術を導入して施工したのだが，なにしろ寄合い所帯の復興局のこと，内務，鉄道，東京府，民間からの若い技術者を中心に，アメリカからの指導技術者をまじえての工事である。これを統率すを現場所長は，なかなかの大任であった。橋梁課長だった田中（豊）君と道路課長の私とは，釘宮君より一足さきに復興事業に参加していたのだが，太田土木課長と私ども3人で，この所長物色の結果は，期せずして君に落ちついたのである。

釘宮君の所長としての苦労は，いわずもがなだが，この工事は予期以上の実績をあげ，空気ケーソン工法は，その後ひきつづいて利用が起こった。隅田川の永代，清洲，言問の三橋梁工事をすますと，君はすぐ鉄道技師に復帰し，空気ケーソン工法による，関西線の木曾，揖斐両河川の鉄道橋梁架替工事の現場主任を引受けた。この工事もなかなかの大工事だったが，これを立派におえると，すぐかっての古巣である熊本建設事務所の所長に転じて，九州の鉄道新線の建設工事を担当，5年を過した。

ところが，昭和になり，鉄道の電化が進展するにつれて，確実な電源確保の必要から，鉄道省自ら信濃川の水力発電をすることを決定，信濃川電気事務所を設けたが，その促進がせまられるにいたって釘宮君がその所長にえらばれた。この工事は当時としては大規模なものであり，それに鉄道としては，およそ畠ちがいの仕事で，所管も電気局と建設局と両局に属する面倒さがあった。君が所長にえらばれた所以であるが，君は民間からの技術陣を率いて，よくこれをこなした。

この工事の目鼻がつきかけた頃の昭和11年に，明治以来の懸案であった，関門の海底鉄道トンネルの着工がきまり，下関改良事務所が設けられた。この工事は，日本ではじめての本格的な水底トンネルで，技術的にも万事が初経験のものである。そして所管はがんらい工務局だが，現場工事にはトンネル技術に経験の深い建設局から，技術者を出して，両局の協力がよかろうということにきまった。この所長の人選が問題だったが，釘宮君に白羽の矢がたったのである。「下関工事事務所二十年誌」をみると，着工当時の工務局長 平井（喜久松）君が回顧記事に，「工事担当者として，釘宮　磐技師が最も適任者と考えたので，建設局長であった河原直文さんに懇望して……」と書いている。

この任にとどまること5年，釘宮君は着手当初の困難を克服し，試掘坑道の完成，つづいて下り線トンネルの貫通を果たして，昭和16年に鉄道の現役生活に別れをつげたのである。

こんなわけで，釘宮君の鉄道生活30年は，画期的ないくつかの大工事の第一線に，卓抜な長として終始したのであって，前にも述べたように，君の技術者としてのえらさであった。

これにつづく君の大学教授生活は，戦争中だっただけ

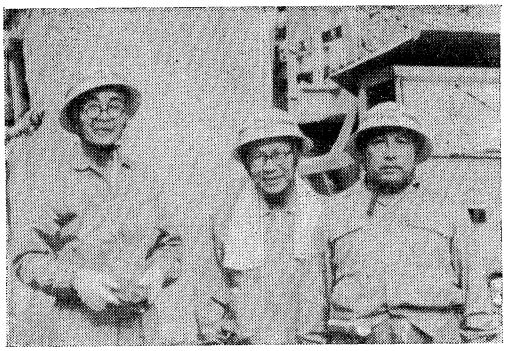
に，骨が折れたものと思っている。終戦の前年だった。満州から上京して君を千葉の第二工学部に訪ねたら，大森の自宅から通うのが面倒と，居室に泊りこみ自炊生活を送りながら頑張っていた。君ならではと，つくづく頭がさがった。

終戦後，私が技術士業務をはじめてから，釘宮君の多年にわたる体験と，それから生まれる知恵とには，一方ならず，お世話になった。自分の仕事に生かせただけでなく，社会的にも活用できたわけで，この無形な宝を君の逝去とともに失ったことは，わが技術界のために，かえすがえすも残念である。

【筆者：名誉員 日本技術士会会長】

ありし日の釘宮先生

（写真左・中央は平山氏，奥只見ダム工事現場にて）



釘宮先生を偲ぶ

丸安隆和

先生が下関工事事務所長として，関門トンネルの指揮をとっておられた時，私は実習生として下関に一夏過したことがある。ちょうど先生はシールド工法の研究のためにニューヨークに御出張中であったので，直接お目にかかることができなかったが，先生のお名前を始めて知り，国鉄技術の粋を集めて行なわれていた工事の総師としての先生の御見識を，いろいろの方からお聞きすることができた。そして，私達にはとうてい手の届かない偉い方と，ただ頭の中で考えているだけであった。

それが，終戦になって私が朝鮮から引揚げて，第二工学部に勤務させてもらうようになってからは，直接に指導をあおぐ立場になったのである。終戦後の物質的にも精神的にも，きわめて困難な時期にあって，私が先生から受けた薫陶の数々は誠に大きいものがあったと今さらのように思い出されるのである。

私がどんな研究に手をつけてよいか五里霧中であったとき，先生に呼ばれて，基礎やトンネル工事に注入工法，特に薬液注入工法の大切であること，まだ薬液注入工法に十分な効果を期待できる方法がないこと，などをいろいろ話された。そして，ぜひこの研究を進めるようにと説得された。当時の私には，薬液注入とは一体どんな方法をいうのか，また，どうして施工するのか，水ガラスとは一体どんなものか，も知らなかったのである。しかし，先生のポケットマネーから大金の研究費をいただいて，何とか実際のお役にたつような方法をつくり出さねばならないことを心に誓ったのである。先生は，御自分から研究の進捗状況を催促されることは一度もなかったが，途中でこちらから実験の報告に伺うと，非常によろこばれて，細かい点に注意をいただいたり，激励されたりしていただいたことが，どんなに研究の意欲をかきたたせるに役立ったことか，つたない文章では，とてもいいあらわすことができない。一応研究が完成して，国鉄信濃川発電所の現場で実地に実験を行なうときにも，また，五十里ダムの仮締切にこれを試用したときにも，その方法について，いろいろな御注意をいただいたのである。

いま，私が教授の席にあって，若い人達に，これだけの指導と援助ができるだろうかと考えてみると，誠にお恥しい次第であるといわなければならない。長い間，国鉄の枢要の地位にあって大工事を指揮され，人格も，見識も，誠にすぐれた大先生であったことを私はしみじみと思い出しているのである。生前，沼田先生から，この恩恵に対して十分な御恩返しをするようにと御注意をいただいたのであるが，先生がこんなに急に逝去されるとは全く考えてもいなかったし，私の怠慢も手伝って，ついに，沼田先生からの御注意を果たすことのできなかったことは，誠に遺憾にたえない。

先生は，このように広い見識の下で部下を指導されたが，先生の私生活は誠に簡素で潔白であった点も私たちのよいお手本であった。先生が汽車に乗られるとき，子供さんと御一緒のときは，決して一等車には乗られなかったということを聞いたことや，食糧事情の苦しかったときは，御自分で千葉の特産をおつくりになり，決して私達に手伝いをさせるようなことがなかったことなど，思い出せば，先生の御人格が今さらのように偲ばれるのである。

したがって，学生達に対しては厳格そのもの，間違ったことに対する批判もなかなか鋭く，あるとき図書閲覧室で大勢集まって騒いでいたら，ちょうど真上にあたる先生の部屋にそれがつつぬけとなり，万雷一時に落ちたかと思われるような一喝を頂載し，学生の代表がおそるおそる謝りに行ったこともあった。

晩年の先生は円満そのもので，注入の研究会にはかかさず御出席になり，若いものを激励して下さった。

明治 45 年卒業の先輩には，非常にすぐれた方が多く，どんな因縁か，これらの方達に直接御指導を仰ぐ機会に恵まれたが，釘宮先生もその中のお一人であって，先生を失なったことは私にとって誠に淋しいきわみである。 【筆者：正員 工博 東京大学教授 生産技術研究所】